

白澤避怪図を広める人々―山岳信仰と白澤避怪図―

熊澤美弓

はじめに

中国発祥の神獣白澤は、日本において、中国から伝わった資料やそれをもとにして記された文献の中で想像上の生き物の一種として、あるいはその名を冠した書名としてなど、さまざまなかたちで文献に名前を見いだすことができる。また、それ以外に、多くは絵画という形でその姿を視覚化した資料も存在する。特に江戸時代において、さまざまな人々による肉筆画が描かれるが、一方で「刷り物」というひとつの形態での広まりがある。

刷り物については、「白沢図」や「白澤像」として江戸時代の出版目録にも複数掲載^{〔1〕}されている。その形態や描かれた内容については詳しい記述がないため、どのようなものは現段階では不明だが、書肆において販売されていたことがわかる。また、販売していたという明確な記録はないが、江戸中期以降に宗教者による頒布が行われたことも確認される。さらに、当時の人々の信仰に関係があると考えられる白澤避怪図も近年発見されてきている。書肆による販売については、関係書肆についての更なる調査を行い、稿を改めて考察する予定であり、本稿においては、白澤避怪図の刷

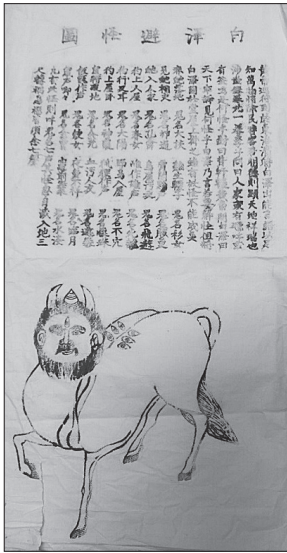
り物との関連が認められる江戸時代の宗教者を取り上げ、考察していきいたいと考えている。

一・戸隠山と白澤避怪図

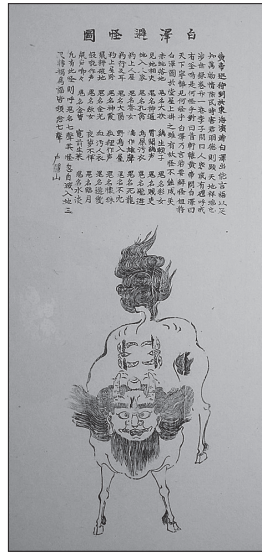
白澤避怪図を配布してきた宗教者として、長野県にある戸隠神社の御師がいることはこれまでも指摘してきた。

簡潔にまとめると、戸隠神社は学問行者によって嘉祥三（八五〇）年に開山したとされ、『梁塵秘抄』巻二でも当時の霊験所のひとつとしてあげられているように、鎌倉から室町時代には山岳霊場として栄えた場所である。戸隠山谷三千坊とも呼ばれて勢力を維持しており、天台宗系修験と真言系の修験が併存していたとされる。しかし、応仁二（一四六八）年に両派に争いがおきた結果、真言系の修験は滅びることとなる。慶長十二（一六〇七）年になると、徳川家康から領知朱印状、戸隠山法度をうけ、寺領千石を安堵され、東叡山寛永寺の末寺となった。寛永寺や延暦寺から多く派遣されることとなった観修院を別当として、奥院・中院・宝光院それぞれに衆徒がいた。そのなかでも中院と宝光院は御師の機能を果たすようになり、戸隠派山伏や天台寺院をも管轄していた。明治維新により、神仏分離令が出されたことで神社となり、聚長³たちも還俗をした。これにより、現在はそれぞれ奥社・中社・宝光社として存在している。戸隠御師は、配下に各地の修験をもち、修験を通じて信者の組織、霞の形成を行っていた。その活動の内容として、『戸隠靈験談』に群馬県箕箕輪村に戸隠の僧宝蔵院恵林が止宿した記事や、水内郡吉原村に真乗院が配札に来ていた記事、常楽院が火防の札を送る記事などがあり、戸隠御師が自ら旦那の元へ赴き配札に回っていたこと、また火防の札を送るなどの行為をしていたことがみえる。また、御札配布以外にも、御初穂の徴収の為の代官である手人派遣や江戸における開帳などを行っている。

戸隠山に現在も数多くある宿坊のなかで、中社の宮澤旅館、宝光社の宮本旅館に白澤避怪図の版木【図1】【図2】が現存している。これらの版木については以前、拙稿⁵で紹介したが、そこでも指摘したように、戸隠では文化九（一八二二）



【図2】 戸隠神社中社宮澤旅館所蔵
白澤避怪図（筆者撮影）



【図1】 戸隠神社宝光社宮本旅館所蔵
白澤避怪図（筆者撮影）

年に宮本旅館の前身である遍照院が「白沢の像」を二枚配布したという記録が残っている⁶⁾。配布したという像がどのようなものであったかについての記録がないため、同一のものは不明であるが、少なくともこのころには頒布を行っていたと考えられる。また、宮澤旅館の版木には、裏面に前身であった宝蔵院の聚長の名が書き入れられており、宝曆十三（一七六三）年から寛政元（一七八九）年二月の間に入手したことがわかる。

このことから、江戸中期以降に戸隠で白澤避怪図の版木が所持され、そこから刷られた札が複数の御師によって頒布されていたと考えられる。ただし、奥社から宝光社までのすべての御師の家について、来歴や所持する宝物などに関する記録として天保十二（一八四一）年に記された「本坊並三院衆徒分限帳」⁷⁾には、「白澤避怪図」や「白澤図」、それに類する記述はみられない。したがって、戸隠山全体として配布していたわけではなく、宿坊が独自に配布していたという可能性はあるものの、「戸隠山」という山名を入れた白澤避怪図が複数存在していたことは事実である。

二 八海山と白澤避怪図

戸隠山の二つの版木のうち、宮本旅館のものに非常によく似た、「八海山」と山名の入った白澤避怪図が存在する。

八海山とは、駒ヶ岳・中ノ岳とともに越後三山・魚沼三



【図3】湯本豪一氏所蔵八海山
白澤避怪図（筆者撮影）

山と称されるうちの、南魚沼にある八海山のことである。登山のための入り口が「城内口」「大崎口」「大倉口」と大きく三つに分かれ、それぞれに複数の里宮があり、さまざまな神を祀っている。中世から近世にかけて、魚沼地方には天台宗本山派、真言系当山派修験が定着し、八海山と関わりがあったということはわかっているものの、関連資料は乏しく、八海山中興の祖である普寛や泰賢があらわれる近世中期まではその活動は不明であることが指摘されている⁸⁾。

近世後期の八海山信仰としては、鈴木昭英氏の研究に詳しい。それによれば、寛政四（一七九二）年にその前年上州奥多野の三笠山を開山した普寛が王滝口登山道を開いて以降、隆盛していくが、御嶽の兄弟山として特に新潟から北関東の御嶽講やその影響化の八海山講の崇敬を集めており、関東の登山講衆にも重視された。一般的な講のように、その中に講元・先達があり、地元には山内を案内する山先達がいたので、山麓の社寺は登山者の着所としての役割を持った。そこで祈祷や祭祓を行い、守札を頒布、さらに宿泊所となり、堂舎・山小屋を管理してはいたが、講社を自ら組織、支配するものではなかった。明治の神仏分離令と修験道廃止によって、講中の先達行者は神道十三派に属し、教導職の資格をもって祈祷・卜占などの宗教活動をするようになった⁹⁾。『八海山開闢伝紀』¹⁰⁾において、大木食行者普寛と二代目行者泰賢の二人が御嶽山・八海山・武尊山の中興開闢をしたとし、また、執筆した三代目の普明自身も信州木曾駒嶽野州長野北辰獄修行の立場から中興開闢を行ったことが書かれている。

尊山が重視されていたことが読み取れると指摘している。

湯本豪一氏『日本幻獣図説』¹¹⁾にこの八海山の白澤避怪図【図3】が収録されており、このたび調査する機会を得た。二〇〇〇年に入る際に古書店か骨董店経由で入手したものであったが、具体的な来歴などの記述や添付文書は存在していないとのことであった¹²⁾。大きさは七十八・〇×二九・七センチメートル、一枚ものであるが、中央の折れ

目の部分から破れが生じており、後ろから紙を貼り付けて補修が行われている。先ほど提示した戸隠山の宮本旅館所蔵の白澤避怪図と比べると、戸隠のものに比べて「八海山」という山名が中央上部に非常に大きく書かれていることや、文章と絵のエリアが分けられておらず、絵の上部の周りを囲むように文字が配列されているなどの違いはあるものの、描かれている絵は非常に良く似ている。

三、武甲山と白澤避怪図

(一) 武甲山

武甲山とは、埼玉県西部、秩父市と秩父郡横瀬町の境にある山の名である。『新編武蔵国風土記稿』¹³⁾では、「一に秩父カ嶽とも云へり。この山は武蔵國第一の高山にて、世に聞へたる名嶽なり、秩父はもとより山國にて、萬重の山多きが中にも、最も高く聳へたれば、秩父嶽とよべるも理りなり、或は妙見山とも唱へしともいぶかし」として、「秩父カ嶽」「妙見山」などとも呼び方があり、武蔵の国の第一の高山にして名山であったことが記されている。また、一七七一頃までに書かれたとされる坂東札所のひとつ、岩殿山正法寺の縁起の冒頭には、役小角が伊豆大島に流された際に、「夜は雲路を凌、豆相武州の靈山に飛行仕給ひて」、つまり伊豆大島から関東地方へ夜ごと渡ってきて、無類秘法を修めていたことが見える。また、「武州には秩父の三峯、武甲山、兩三嶽、人間の葛城の嶺、比企郡岩殿山の大峯（俗に大峯の臺と云ふ）、石坂野の葛城（俗に物見山と云ふ）、其外小角飛行の靈山數多し」として、当時の伊豆・相模・武州の靈山が挙げられており、その中に武甲山が入っている。このように、古来武蔵国では有名な靈山であり、後述するが、周辺地域の人々にとっては信仰の対象でもあり、神奈備山として受容されている。

しかし、昭和四〇年代、高度経済成長によるセメント需要が急増、さらに西武鉄道秩父線の開通による三菱鉱業セメ

ントの誘致などが行われ、大量の石灰岩の採掘が武甲山において行われた。このため山上部から山頂にかけて山は大きく削られ、昭和五〇（一九七五）年には山頂の武甲山御嶽神社奥社を約三〇メートル下に移転している。このとき、学術的な総合調査が実施され、昭和六二（一九八七）年に報告書が作成された。

武甲山御嶽神社の縁起としては、日本武尊が東征したおり、山頂に武具を埋めて関東鎮護としたことがはじまりとされ、欽明天皇の御代に日本武尊を主神とし、男大迹尊、広国押武金日天皇を合わせ祀り、戦国時代に兵火に遭い焼失するも、北条氏邦によって再建されたという。ただし、「武甲山御嶽神社」となったのは明治に入ってからである。その前身は山上にあった蔵王権現社であり、その他に熊野権現社・大通両権現社やその末社が、また、関係する寺院として金玉寺があったとされる。しかし、文化十二（一八一五）年『武蔵野話』では「止武光山は麓より山上まで行程五十町ありて山上に蔵王権現熊野三社の叢祠ありて傍に鐘あり。（中略）爰に記す所の金玉寺さだめて修験者なるべし。しかれども今金玉寺のかたなし。やうやく貞享年間の事なれば今しれざる程の年代にてもなし。横瀬村の者に問にしれず。今は森屋氏この祠を守れり。」として貞享年間（一六八四～一六八八）にはあったものの、現在は存在しないことが記されている。「秩父の歴史略年表」では貞享三年（一六八六）三月に武甲山山頂の秩父山金玉寺に梵鐘が奉納されたという記事を挙げ、この時期以降、金玉寺に関する資料はみられなくなること指摘する。また、同記事に関連した考察として、以下のように述べている。¹⁶⁾

この時期以降、金玉寺に付属していたと考えられる蔵王権現（社）が独立、山頂具に定着する。この権現が修験系の、神仏習合から生まれた信仰の象徴であることは言うまでもないが、武甲山の場合、これを管理・経営するのは神職者である。中世末期に成立したとする棟札をもっていた熊野権現社も神職者である。そうした事情を相対的に理解するためには、この山にかかわる信仰的・歴史的背景のなかに、仏教色を敬遠する古神道的性格がよこわっていることを認めてよいのではないだろうか。

つまり、武甲山では修験系の信仰があり、仏教が関わる時期もあったものの、古神道的性格が強く、仏教色は定着しなかったということである。宝暦から天明頃に記されたことされる「秩父風土記」¹⁷⁾には、「武甲庄 横瀬村」として、「秩父山金玉寺神主ハ守屋氏四人森屋の字にハ無之候 増氏二人有之候 蔵王大権現 二十八代安閑天皇武金日尊と申奉也 大通龍大権現 日本武尊十二代景行天皇之御子 熊野大権現 速玉男尊事解男之命」とあり、金玉寺と言いつつもその管理は「神主」と記されている。

また、山上にあった社殿については、書物によりさまざまな書かれ方をしている。

享保一二（一七二七）年の年号がある覚え書きには、武甲山蔵王権現神主 守屋越前、武甲山蔵王権現末社 大通両権現 社人 守屋丹後、武甲山蔵王権現末社 熊野権現 社人 守屋薩摩、諏訪大明神 守屋越前支配 増吉之助という人々がそれぞれ出てくる¹⁸⁾。また、「村鑑帳面之写」として、武甲山の小社などの記録があるが、それを見ると、享保十二年には前述の蔵王権現・大通両権現・熊野権現・諏訪大明神に加えて、丹生明神・天狗社・愛宕山・鑑取明神・諏訪明神・白髪明神といった小社があったようである。さらに、元文四（一七三九）年にはこれに加えて神明宮・山神の小社も増えている¹⁹⁾。

延享三（一七四六）年には、忍藩江戸屋敷から秩父代官所に、幕府巡検使が来ることが通達され、その巡検使に提出するための書類作成のためか、武甲山神主越前から山上の社に関する報告書が出されているが、ここには「武甲山蔵王大権現本社其外末社十式社祭礼小屋三軒」とあり、祭礼小屋も作られていたことがわかる²⁰⁾。

文化元（一八〇四）年の頃に執筆が開始された『新編武蔵風土記稿』²¹⁾では、「横瀬村」に「蔵王権現社」として「武甲山の頂上にあり除地三段神主守屋越前吉田家の配下なり」とある。祀るのは日本武尊、蔵王権現（押武金日尊）、少彦名命、大男迹尊、継体天皇、薬師仏であり、山上には本社、拜殿、鐵灯籠一對、木華表三基、丁計の石、奥院、明王権現社、大天狗社、秋葉社、山神社、日本武尊碑、撞鐘堂があり、東照宮奉納の刀などの宝物を有することが記されている。また、山上にとともにあった熊野権現社については、「此社を末社とは唱ふれども本社にならびて構も大きく殊に

旧きさまなり除地三段神主守屋大隅吉田家の配下なり」とあり、熊野権現の末社として、浅間八旗合社、白鬚社、保食社、天狗社、道祖神社を管理していること、大通両権現は「奥院の側にあり除地六畝大宮郷園田筑前が触下守屋兵庫が管する所なり」として、猿田彦命、天鈿女命を祀るとし、八幡社、高根社、駒形社を末社とするとしている。

その建物については、「寺社境内間敷庵宮小社石地藏道印御引合之上御調書」に「武甲山鎮座」として、以下のような記載がある。

「武甲山蔵王権現宮松皮葺 梁間八尺八寸六分 桁行壹丈四尺六分 神楽殿板葺 梁間九尺 桁行壹丈貳尺 鉄燈籠壹対 高サ七尺六寸五分 鐘 高サ貳尺五寸 経壹尺七寸五分 雨覆板葺 五尺五寸四方／字的所 木華表壹基 高サ九尺五寸四分／字生川 木華表壹基 高サ一丈貳尺八寸／字廣芝 木華表壹基 高サ一丈貳尺四寸 丁印石 上下九拾六本 末社 奥の院 明王権現宮板葺 横貳尺奥行三尺三寸六分 秋葉権現宮板葺 横壹尺貳寸 奥行三尺六寸貳分 大天狗宮板葺 横壹尺八寸八分 奥行三尺壹寸六分／字高橋 山神宮板葺 横壹尺八分奥行三尺八分」

「武甲山蔵王権現末社の院 大通両権現宮板葺 横壹尺八寸八分奥行壹尺八寸八分 八幡宮板葺 横壹尺貳寸八分奥行壹尺八寸八分 高根権現宮板葺 横壹尺七寸貳分奥行壹尺九寸六分 駒形宮板葺 横壹尺五寸八分奥行壹尺六寸」

「武甲山鎮座蔵王権現末社 熊野権現宮板葺 梁間六尺貳寸四分 桁行九尺五寸三分 末社 浅間八 宮板葺 横壹尺奥行壹尺八寸／大破二付取毀置候旨追而願之上再建仕度段申聞候／白髪明神板葺 横貳尺奥行壹尺八寸 保食明神宮板葺 横壹尺八寸奥行壹尺三寸 天狗宮板葺 横壹尺貳寸奥行壹尺九寸 道祖神宮板葺 横八寸三分奥行壹尺五分」

天保十（一八三九）年頃から執筆が開始された『秩父志』²⁴では、

武甲山本社は此高頂上南面に在りて蔵王四坐大権現、祭神日本武尊、武金日命、少名彥命、大男迹命四坐、御除地三段歩、神主守屋越前守、吉田殿配下拜殿一字。○奥社、本社の上頂上に町在、大通龍大権現称、祭神日本武命、神主守屋兵庫頭今止家。末社三字各小天狗社秋葉社山神社。○熊野大権現列社、大一字。御除地三段歩、祭神速玉男命、一坐。神主守屋大隅守、吉田殿配下。末社四字各小浅間、八旗合社、白鬚社、保食社、天狗社、奥鳥栖一基額、行舎二字、本社二丁下に有り。

とある。したがって、大通両権現社は蔵王権現院の奥院、熊野権現社は蔵王権現社の末社ともされ、諸社の統括は蔵王権現と考えられたこと、山上にはそれなりの建物が造られていたことがわかる。ただし、天保三（一八三八）年の『天保巡検日記』²⁵に武光山登山の記述によると、「上り詰めて本社あり、相應之大社にして熊野権現を勧請す、常には人も参詣せず、又社人も住居せざる所にて、雲気深く社邊樹梢よりさるをかせ夥しく垂て地を拂ひ雲烟のごとし」とあり、また、『遊歴雜記』²⁶でも「当山に鎮座する神は蔵王と熊野と二社なり 神職は麓に住て四月より頂上に移住し來賓を待とぞ」とあり、『天保巡検日記』蔵王権現ではなく熊野権現を本社と呼んだり、『遊歴雜記』では大通両権現については触れていないなどということがあるものの、山上の社は無住であることがわかる。これは現在でもそうで、普段は宮司は麓で暮らしており、山開きなどの儀式の際に登頂することである。²⁷台風などでたびたび大破や倒壊が起き、その再建許可を求める講が行われたり、再建許可願が何度も提出されたりしている。²⁸

明治三八（一九〇五）年、神社合祀令により、蔵王権現社が村社御嶽神社となり、熊野権現も合祀された。武甲山麓の横瀬町には、武甲山御嶽神社の里宮がある。これまでの資料にもみえるように、江戸時代は代々守屋氏が受け継いでいたが、現在の宮司は斎藤国弘氏（昭和二十一年生まれ）で、平成二十二（二〇一〇）年から宮司をつとめている。先

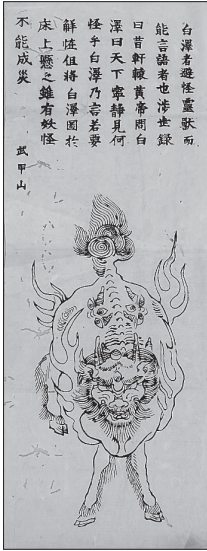
程から「武甲山御嶽神社」と文中では呼称しているが、斎藤氏によると、神社帳に登録している名前は「御嶽神社」であり、「武甲山」は他の御嶽神社と区別をつけるために「武甲山」を付けているということである。⁽²⁹⁾

武甲山御嶽神社に属して活動する山伏の存在は確認できていない。しかし、「秩父の歴史略年表」では葛西八郎清基が熊野権現社（那智）に願文を奉納したことを皮切りに、一五九九年まで秩父出身者らの熊野信仰を示す記録があることを指摘する。⁽³⁰⁾ また、一三三五年には秩父神社が落雷のため炎上し、それ以降、妙見菩薩を合祀し秩父妙見宮となったこともあげ、秩父神社は妙見信仰の神体山である武甲山の遙拝所としての拠点であった可能性を指摘している。⁽³¹⁾ 文化九（一八二二）年に執筆の始まった『遊歴雜記』は、そのなかで武甲山のことを「是大宮宿妙見尊の奥の院なりといふ」と言っている。さらに、周辺地区に「観音三十四カ所」の存在があり、これも武甲山を信仰の対象に考えていたとされ、関連する修験が在住していたという記録がある。斎藤氏に確認したところ、現在の武甲山御嶽神社とはこれらの信仰とは関係はないとのことであった。さらに、武甲山の御嶽神社のことを、横瀬の人々は「武甲山さま」と呼ぶそうである。⁽³²⁾ つまり、他に武甲山は秩父における神奈備山であり、山自体を神体とみている信仰が複数あるにも拘わらず、武甲山御嶽神社＝武甲山という意識が地元の人々には強くあるようである。

（二）埼玉県飯能市郷土館所蔵加藤樹家護符

この武甲山の名が見える白澤の札が、埼玉県飯能市郷土資料館に所蔵されている。「加藤樹家護符」と名付けられた資料群のなかにあったものだが、この加藤樹家護符とはそもそもどういうものだろうか。これについては、飯能市郷土館の村上達哉氏の論文に詳しい。それによれば、加藤家は、埼玉県飯能市名栗というところに所在する家で、もともと松木にあったものが江戸の終わりに現在位置に移転してきた。移住当時は、畳屋と養蚕が主な生業だったと伝わっている。

この加藤家の敷地内にあった土蔵の二階から発見されたのが、護符を中心とした資料群である。平成二十二（二〇一〇）



【図4】飯能市郷土館所蔵
武甲山白澤避怪図（筆者
撮影）

年に加藤樹氏により飯能市郷土館に寄贈され、資料館学芸員による整理と調査が行われた。その数は、三四七五点にも及ぶと言われる。寄贈者の計らいで、ある程度のまとまりにわけられていたが、資料全体としては弘化三（一八四六）～昭和四八（一九七三）年にかけての年代のものであった。この加藤樹家文書の護符について、村上達哉氏が、護符の配布をした神社の検討を行っている。これによれば、所在が明らかな神社は一五〇か所、不明なものが五四か所とされている。さらに、加藤家が目立って多くの護符の配布を受けている寺社、おそらく講などに参加し複数年にわたり護符の配布を受けている寺社、遠方だが御師を介在し護符の配布を受けている寺社、檀那寺を初めとした居住区近隣に所在する寺社、参詣の際に護符を求めたと思われる寺社という区分により細分化を行っている。その結果、複数年にわたり護符をうけていた神社としては、大山（神奈川）や、武蔵御嶽神社、榛名山、富士山、高山不動、成田山新勝寺、三峰神社、古峯神社、子の権現、秩父御嶽神社、高尾山（葉王院）、川崎大師などの近隣寺社が多い。しかし、資料全体を見てみると、東北・関東・甲信越・東海・関西・中国・九州と、ひろく全国にわたっている⁽³⁵⁾。

このような資料である加藤樹家護符のなかでも一一群として分類されるまとまりのなかに、武甲山の名が書かれた白澤避怪図【図4】が含まれていた。村上氏による調査と検討によれば、一一群は基本的に紙資料であり、おおよその年代としては弘化三年から明治二十八（一八九五）年の間のものであるとされている。また、武甲山（武甲山御嶽神社）の護符の点数は二十四点であり、加藤樹家護符全体の〇・六九%となっている⁽³⁶⁾。また、武甲山（武甲山御嶽神社）

名栗に居住しており、武甲山は居住区ではなく、その隣接市町となる。その区分のなかで見ても、武甲山の護符の割合は決して低くはない。

白澤避怪図の大きさは、五十七・五×二〇・六センチメートルであり、中央付近で二紙を繋ぎ合せている。これは上部に文言、下部に白澤が描かれているという点で

は、戸隠山や八海山の札とも形式は同じだが、上部の文言は『涉世録』の全文ではなく冒頭部分のみであり、構図は類似しているものの、人というよりは正面から見た獣の顔である。描かれている白澤も、戸隠山や八海山の札とはあまり似ていない。文章の省略については、佐々木聡氏が指摘する白澤資料における辟邪理念の簡略化³⁸が関係しているのではないだろうか。つまり、元々の詳細に怪異の内容を記し細密な絵を添えていた白澤避怪図から、時代が下るにつれて簡略化され、文章や絵が簡潔でも効果があるとされていくことである。さらに、絵のみ・文のみでもその効果があるとされていくのであろう³⁹。これについては、さらに調査を重ね考察をしなくてはならないが、戸隠の白澤避怪図の確定している年代と武甲山の白澤避怪図の推定年代の差を考えると、あり得ないことではないと考えられる。

前述の通り、武甲山を神体とみる信仰は複数あるが、加藤樹家護符で確認した上では、「武甲山」という記述が見られるのは武甲山御嶽神社のものだけであった⁴⁰。武甲山御嶽神社では四月十五日（祈年祭）・五月一日（山開き）・十月一日（例大祭）という祭日があり、それぞれで木製の護符を配布する。そのうち四月十五日には太々神楽講中・根古屋地区を中心に、十月一日には横瀬の約一〇〇〇世帯に配布される。そのほかに、九月一日頃に、横瀬の隣の地区である山田地区の人たちが取りに来るといふ氷雨除の護符があるが、白澤避怪図の配布などは行われていない⁴¹。しかし、武甲山と書かれた護符⁴²武甲山御嶽神社の護符であるといえるならば、現在は来歴が判然としないものの、武甲山御嶽神社において配布していた可能性が非常に高いと考えられる。

四、白澤避怪図と宗教者

現在、刷り物の白澤避怪図が確認できているのは以上三ヶ所四点である。

戸隠山は御嶽信仰という呼び方ではないが、山自体が信仰の対象であり、戸隠山から高妻山の奥にある両界山付近まが修験の地として利用されていたと考えられており、修験者が使用した洞窟や岩屋である三十三窟が山の中腹に残存

している。全国に講を持ち、御師による配札が行われ、さらに複数の修験が存在している地である。

また、八海山も山自体が信仰対象であり、前述の通り、中興の祖である普寛は、上州奥多野三笠山や木曾御嶽などの山を開き、新潟から北関東の御嶽講も行っているというところから、御嶽信仰と結びついている。こちらも複数の修験が存在し、活動していた。

武甲山も、これまで見てきた通り、明治維新までは蔵王権現や熊野権現などの諸社が存在したが、それ以降は武甲山御嶽神社となっている。また、周辺にある秩父三十四カ所観音巡礼地や秩父神社による妙見信仰など、さまざまな信仰から山自体が神体と考えられていた。「武甲山さま」と呼ばれる武甲山御嶽神社は、現在の聞き取り調査では周辺の信仰と直接のかかわりはないといわれ、不明である。ただし、秩父と熊野信仰のかかわりや、在郷の者が一代修験となることはあったようであり、この地域に一切修験が関わらなかったという話ではない。

このような地域の名が入ってはいるが、それぞれ来歴が異なるため、研究をさらに深めていく上では注意が必要となるが、こうして四点の白澤避怪図の刷り物を比較してみると、どれも山岳信仰に関わりのある地の名前が入っていることが確認できる。

ここで、改めて白澤について考えてみたい。白澤は祥瑞の獣の一種であり、話すことができるとされる。『三才図会』などでは王の徳が世間に広がれば現れる存在であるとも言われている。東望山に巡狩する途中の海浜にて中国の五帝の一人である黄帝と出会い、天下の鬼神について語り、それを黄帝が広め人々を妖怪の害から救ったとされる。

この白澤が日本の山岳信仰と結びつけられるとすれば、何らかのかたちで「山」と結びつきがあると考えられる。その視点で見ると、いくつかの接点が見いだせる。たとえば、『抱朴子』内篇十七登涉に「白澤図」の記述がある。この章では、山に入るときの心得が記されており、護符の携帯や鏡の所持など様々な事例が挙げられているが、そのなかで、山川の廟堂で百鬼を防ぐ方法として「百鬼録」や「白澤図」、「九鼎記」で鬼の名を知れば鬼たちは自分から退いていくという記述がある。

また、日本では、旅行の安全を守るために携帯するという例がいくつかあるが、例えば『旅行用心集』においては、「山中にて狐狸猪狼の類、近付さる方」として「五岳、白沢の両図を懐中すれば、旅中の災難を免れ、悪鬼、猛獸近付ことあたはず」という一文がある。さらに、白澤の絵とともに、白澤の図を懐中していれば山海の災難や病苦をまぬがれるだけでなく開運になるという文章が添えられている。ほかにも、旅行の際に持ち歩くであろう『旅中必携五海道中獨案内記』^④といった案内記や地図類にも白澤は描かれている。このことから、白澤の図は旅行の安全を守るための護符として使用されており、旅行の指南書や道中記に載せられるくらい普及していたことが推測できる。江戸時代の旅行として、まず想定されるのはおかげまいりやそれに付随して各地の寺社を参詣することだが、こうした寺社参詣の流行のなかで旅のお守りとして白澤が受容されていたことがわかる。これまで見てきた刷り物の白澤避怪図を有する寺社を考えると、神道か仏教かということはそれほど重要視されることではなく、むしろ修験道に関係が深いと考えられる。また、修験道も白澤も、山に関わりを見いだすことができる。もちろん、修験道と山のつながりからいきなり中国の道士の山岳修行に名前がみえる白澤を即時結びつけるということは賛否両論あるであろうし、中国の道教や靈獸、さらに白澤についての知識がどのように日本に伝播し、修験道に取り入れられたのかということを考え、文化史のなかに位置付けるという作業が必要となってくるだろう。今後の課題として、ここに提示しておきたい。

◎まとめ

これまで宗教者の配布する白澤避怪図として確認できるものとしては、戸隠山のものばかりであった。そのため、どうしても戸隠山の白澤避怪図のみに偏りがちであった。しかし、今回、八海山という字とともに刷られた白澤避怪図、埼玉県飯能にある飯能市郷土資料館が所蔵する武甲山の白澤の札が確認できた。戸隠とは違い、どちらも版木の存在までは確認できていないが、それぞれの山の名前が明らかに入っていることから、白澤避怪図は決して戸隠山でしか存在

していなかったものではないといえる。

現在、刷り物としての白澤の札やその版木が確認できるのは、戸隠山、八海山、武甲山の三か所である。この三か所の共通項について考えてみると、仏教的性格や神道的性格の強弱の差はあれど、修験道や山岳信仰に関わりが深い地域である。また、その寺院だけで完結するのではなく、古くから信仰され、あるいは他地域との多くの交流がある地域であるともいえる。

先程考察したように、『抱朴子』では山岳修行をする道士たちへの章で災いを避けるものひとつとして、白澤図が挙げられている。さらに、日本でも書物の中で山海の災難や病苦を退けるとされ、旅行の際の地図や道中記にその姿が描かれる。こうして考えると、白澤は山岳との関係が意外と深い。白澤は単に旅中の災難全般を避けるだけではなく、「山」と結び付けて考えられていた部分があったのではないだろうか。

以上のように考えると、これまでは単なる護符の一種として考えられていた刷り物としての白澤避怪図の広がりや、山岳信仰や修験、それに関わる神社仏閣と関係する人々が媒介者となった可能性があるとと言えるのではないだろうか。また、加藤樹家護符を見ると、各地の寺社の護符配布は広範囲にわたり、ひとつの家に各地の御師によっていくつもの護符が届けられている。想像をたくましくすれば、配布方法の形態はさまざまであろうが、その過程で配布する御師や媒介者同士が接触することもあったのではないだろうか。

白澤避怪図を配布した先程の三か所も、それぞれその地方の信仰の中心となった山岳であり、白澤避怪図に限らずとも、信仰する人々に対して護符の配布は行われていた。刷り物の白澤避怪図を考察する中で、八海山と関東の御嶽信仰とのつながりも明らかになった。また、戸隠修験道の復興には英彦山の即伝が関わっていたり、以前行った聞き取り調査において、柱松神事の復活の際には他の山岳信仰の神社にやり方を再確認するなどして近隣の修験の協力があつたこともわかっている。現段階では推測にすぎないが、資料に関連する地域などから、少なくとも関東・中部圏を中心とした修験のネットワーク構成の媒介のひとつとして白澤避怪図が利用されていた可能性も考えられるのではないだろうか。

か。戸隠神社の場合もそうであったが、明治維新後の大きな変化による混乱が原因で版木が行方不明になったり、その来歴が失われたということは十分に考えられる。武甲山御嶽神社の場合も、山上の神社や里宮の倒壊の記録、神社合祀令による変遷など多くの変化がおきている。そのため、白澤資料の年代確定やその受容について明らかにすることは簡単なことではなく、佐々木氏が提示した辟邪理念の簡略化や神社の歴史、日本全体の歴史、文化史の流れなど、さまざまな視点から考察しなければならぬだろう。今後も調査を続け、考察を深めていきたい。

また、宗教者による配布以外にも、白澤避怪物の頒布やその配布者から、当時の人々による信仰の一端が垣間見える。今後もさらに調査を重ね、白澤避怪物をめぐる人々のつながりを明らかにしていきたい。

(本稿については日本民俗学会第六十八回年会において発表したものに、その後調査を重ね、論を加えたものである。貴重なご意見をいただいた先生方ならびに、資料の閲覧・掲載を快くご許可くださった諸氏、聞き取り調査にご協力くださった諸氏にこの場を借りて深謝の意を表したい。)

注

- (1) 『享保以後江戸出版書目 新訂版』(編者 朝倉治彦 大和博幸 臨川書店 一九九三)・『享保以後大阪出版書籍目録』(編纂者 大阪図書出版業組合 清文堂出版株式会社 昭和十一年五月二十五日発行 昭和三十九年八月二十五日限定復刻)・『大増書籍目録』明和九年京都武村新兵衛刊(『斯道文庫書誌叢刊之一 江戸時代書林出版書籍目録集成(二二)』編者 慶應義塾大学付属研究所斯道文庫 発行所 井上書房 昭和三十八年十月二十五日発行)などに記述が見られる
- (2) 『梁塵秘抄』(日本古典文学大系『和漢朗詠集 梁塵秘抄』所収 一九六五 三九九頁)
- (3) 「聚長」は戸隠独自の言い方であり、神官のこと。
- (4) 二沢久昭「戸隠靈験談」(仮称) 翻刻並びに解説(『長野』第五十六号所収 一九七四)における二沢久昭氏の解説により、戸隠衆徒・正智院・寛量(文化十二年)明治二十五年)が戸隠山顯光寺の命令ないしはバックアップのもとに編集したと考えられることが指摘されている。

- (5) (コラム) 「白澤と戸隠御師」(アジア遊学一八七「怪異を媒介するもの」勉誠出版 二〇一五)
宮本旅館の白澤避怪図は縦六八・〇×横三三・三センチメートル、宮澤旅館の白澤避怪図は縦五四七×横二九・〇センチメートルで、どちらも一枚板の版木である。
- (6) 「文化九年十一月 中院普賢院等宛新版御影広布出入裁断状」(『長野県史 近世史料編第七卷(一) 北信地方』所収 長野県史料行会 一九八一)
- (7) 「本坊並三院衆徒分限帳」(『新編信濃史料叢書 第一四卷』所収 信濃史料刊行会 一九七六)
- (8) 鈴木昭英『修験道歴史民俗論集3 越後・佐渡の山岳修験』法蔵館 二〇〇四
- (9) 注八に同じ
- (10) 山岳宗教史研究叢書17『修験道史料集1 東日本篇』(五来重 名著出版 一九八三)
- (11) 湯本豪一『日本幻獣図説』(河出書房新社 二〇〇五)
- (12) 二〇一六年七月二十三日、四日市市立博物館における聞き取り調査による
- (13) 大日本地誌大系一二『新編武蔵風土記稿』第二二卷(蘆田伊人 雄山閣 一九五八 一七〇頁)
- (14) 「岩殿山正法寺縁由」(『秩父 武甲山 総合調査報告書』下巻 人文編 武甲山総合調査会 一九八七 三二頁)
- (15) 『武蔵野話』(斎藤鶴磯 有峰書店 一九七〇 一六三頁)
- (16) 「秩父の歴史略年表」(『秩父 武甲山 総合調査報告書』下巻 人文編 武甲山総合調査会 一九八七 一一一―一二二頁)
- (17) 「秩父風土記」(『横瀬町誌資料編(2) ―江戸期文書第二集―』横瀬町 一九八一 二六九―二七〇頁)
- (18) 「武甲山と護持史(三) 武甲山護持神職守屋家格式」(『横瀬町誌資料編(5) ―江戸期文書第五集―』横瀬町 一九八五 九九頁)
- (19) 「武甲山と護持史(三) 武甲山護持神職守屋家格式 村鑑帳面之写」(『横瀬町誌資料編(5) ―江戸期文書第五集―』横瀬町 一九八五 一〇五―一〇六頁)
- (20) 「秩父の歴史略年表」(『秩父 武甲山 総合調査報告書』下巻 人文編 武甲山総合調査会 一九八七)
- (21) 松本家「御用日記」延享三年寅年一月廿七日記事(『秩父 武甲山 総合調査報告書』下巻 人文編 武甲山総合調査会 一九八七 三〇三頁)

- (22) 注一三に同じ
- (23) 「寺社境内間数庵宮小社石地蔵道印御引合之上御調査書 御下書帳 文化六年(一八〇九年) 加藤(嘉)家文書」『横瀬町誌資料編 (4) — 江戸期文書第四集 —』横瀬町 一九八三 二二三—二二五頁)
- (24) 「秩父志」(「新訂増補埼玉叢書第一卷」稲村坦元編 国書刊行会 一九七〇 一五六—一五七頁)
- (25) 「藤原清雄(芳賀市三郎)著『天保巡見日記』」(「秩父 武甲山 総合調査報告書」下巻 人文編 武甲山総合調査会 一九八七 三四四頁)
- (26) 「遊歴雜記」(「新編埼玉原史 資料編一〇 近世一・地誌」一九七九 九二—三頁)
- (27) 二〇一六年八月二十二日、横瀬町歴史民俗資料館学芸員深田芳行氏と武甲山御嶽神社宮司齋藤国弘氏に対して武甲山御嶽神社里宮社務所において行った聞き取り調査による。
- (28) 二〇一六年八月二十二日、武甲山御嶽神社にて入手した「武甲山御嶽神社参拝のしおり」や「秩父の歴史略年表」などの関係資料に蔵王権現や熊野権現の再建についての記事がある。これらを見ると、大風や台風による倒壊が多かったようである。「武甲山御嶽神社参拝のしおり」には、一六九九年に蔵王権現が大風により大破した際には、その再建のために頼母子講が行われたという記述も見られる。
- (29) 注二七に同じ
- (30) 「秩父の歴史略年表」(「秩父 武甲山 総合調査報告書」下巻 人文編 武甲山総合調査会 一九八七)
- (31) 注二九に同じ
- (32) 注二六に同じ
- (33) 「秩父 武甲山 総合調査報告書」下巻 人文編 武甲山総合調査会 一九八七 三五五頁ならびに齋藤氏への聞き取り調査より
- (34) 清水武甲「武甲山と神奈備信仰」(山岳宗教史研究叢書8『日光山と関東の修験道』一九八六第三刷)
- (35) 村上達哉「加藤樹家護符にみる子ノ権現・竹寺・高山不動への信仰について」(「飯能市郷土館研究紀要 第六号」飯能市郷土館 二〇一五)・飯能市郷土館収蔵資料目録6 民俗資料目録2『護符・版本など』飯能市郷土館 二〇一六)
- (36) 飯能市郷土館収蔵資料目録6 民俗資料目録2『護符・版本など』(飯能市郷土館 二〇一六)

- (37) 飯能市郷土館収蔵資料目録6 民俗資料目録2 『護符・版木など』(飯能市郷土館 二〇一六) 六四―六六頁において、村上氏は「第
四表 各神社より配布された護符の点数」として、加藤樹家護符に含まれる護符を寺社ごとに点数や護符総体の中での割合を挙げて
いるが、さらに所在地によって「居住地区」「近隣地区」「隣接市町」「埼玉県内」「関東地方」と徐々に範囲を拡大し、さらに地方ご
とに分類を行っている。これによれば、所在地不明資料をのぞけば、関東地方・近隣地区について隣接市町の護符の割合が多く、さ
らに、武甲山御嶽神社の護符は、隣接市町として分類された三五ヶ所のなかでは三峯神社・武蔵御嶽神社・昌安寺について点数が多
く、同数は秩父神社と高水山常福院のものであった。
- (38) 佐々木聡『白沢図』をめぐる辟邪文化の変遷と受容」(『日本中国学会第一回若手シンポジウム論文集―中国学の新局面―』
二〇一一)
- (39) このことについて、東洋大学文学部非常勤講師久野俊彦氏から福島県南会津郡只見町の医家である原田家の四代目了女が松山村の
名主であり絵師文人でもある佐々木松夕のもとで写した『白沢之修文』をご教示いただいた、内容は戸隠や八海山の白澤避怪図と同
様の『涉世録』の文章である(只見町文化財調査報告書第21集『医家原田家書籍目録』福島県只見町教育委員会 二〇一六) これに
ついて今後調査し、検討を加えていきたい。
- (40) 二〇一六年八月二十一日、飯能市郷土館における資料調査によって確認した。
- (41) 注二七に同じ
- (42) 『旅行用心集』 八隅蘆庵(生活の古典叢書3 『旅行用心集』解説・注 今井金吾 発行所 八坂書房 一九六二 四八頁)
- (43) 日本地図選集『徳川治世諸国道中細見絵図集』(人文社 一九七二)